

—チベット・ビルマ系諸言語における“唇歯母音”—

鈴木 博之

キーワード：チベット・ビルマ諸語、音標文字、唇歯摩擦音、音節核

[要旨] 本稿では、チベット・ビルマ諸語のいくつかの言語に認められる、音節核をなす [v] という分節音について、それが調音音声学的にあいまいな表記であるため、1) 調音器官の接近性、2) 円唇性、3) 舌位置の3点で精密化する必要があることを示し、区別されるべき音声とそれをいかに表記するかについて具体例を交えて提案する。

1 はじめに

調音音声学的観点から見て、分節音について子音と母音を一義的に分けるのは困難であり、各言語または理論的立場によってその基準が分かれるものである。一般に母音はその共鳴度の高さから、音節核を形成する主要な要素である。そして、調音音声学における母音の定義は口腔内における舌位置と唇の形状によって行われる。一方、音節核には母音とは呼ばれないもの、たとえば /r, l, n/ のような共鳴音が占める言語がある。クロアチア語の *hrvatski* 「クロアチア語」の第1音節などがその例である¹。音韻論的にはこれらも母音と呼ぶ立場もあるだろう。

母音の共鳴度が低いというのは可動器官（舌）と被動器官の間が狭くなることを指し、さらに狭窄すると流れる呼気の摩擦の度合いが高まることによって、接近音、やがては摩擦音が生じることになる。「舌尖母音」として知られる [ɹ] や「そり舌母音」として知られる [ɻ] などは、共鳴度の低い、すなわちより強い摩擦性を帯びた母音である。この摩擦性に注目して、近似的に [ɹ]=[ɹ̥]、[ɻ]=[ɻ̥] と言うように、有声摩擦音を音節核とする音と同義であるという趣旨の記述がなされることがあるが、これは実際には区別されるべきものであるとされる（潘悟雲等 2012:4-5）。なお、[ɹ] や [ɻ] は国際音声字母 (IPA) には登録されていないが、シナ・チベット語族の言語を中心に頻出する音であるため、音標文字としては必要不可欠である（朱曉農 2010:17-21）。

摩擦性の高い音について、チベット・ビルマ諸語のいくつかにおいて摩擦音が音節核として現れるものがある。それは有声唇歯摩擦音の音標文字で書かれる [v] である。これは音標文字

¹ 子音連続中に現れる r が音節核の位置を占めるかどうかは、各言語の事情によって異なる。先のクロアチア語の例における r が音節核をなしているといえるのは、r が声調を担えることによる。*hrvatski* という例では、r が低短型声調（´）を担っている。ただし声調符号は正書法では記述されないし、方言によって異なって現れる。また、*přst* 「指」といった、r 以外に音節核をなさないような語例も認められる。

の定義上、舌が構音に関わらない。この音をもつ言語は、主に中国雲南省、甘肅省および青海省に分布する諸言語に認められる。ただし、[v]の音価は言語によって異なり、また独立した/v/という音素になるかもしくは/u/の変異と分析されるか、といった異なりもある。[v]に関して、先行研究に記述があるものを挙げると、たとえば以下のようなものがある。

A [v]が1つの音素として現れる言語

イ語² 新安郷滑竹箐、沖鋒郷三家村、蘇雄郷、娃飛郷二村各方言（王成有 2003）、八二語 菜園、水葵、浪雜各方言（李永燧 2007）、ナシ語青龍方言（姜竹儀 2007）、ナシ語大研方言（黒澤 2009）、ト口語水井方言（蓋興之 2007）、カツォ語（戴慶廈等 (1991)、和即仁 (2007)）、ペー語金華方言（徐琳・趙衍蓀 2007）、ペー語妥洛、俄嘎、金満、金星、大石、周城、馬者龍各方言（汪鋒 2012）、ペー語趙莊方言（趙燕珍 2012）、リス語永勝方言（木玉璋、孫宏開 2011）

B [v]が何らかの音素の自由変異音として現れるもの

ラフ語勐朗壩方言（張蓉蘭・馬世册 2007）、ザウゾウ語（孫宏開 2007）、サドウ語（白碧波等 2012）、アムドチベット語 sDowi（循化）、Wayan（化隆）、gCantscha（尖扎）、Mangra（貴南）、Grotshang（卓倉）、Rebgong（同仁）各方言（王雙成 2012）

以上のうち、黒澤 (2009) には/v/の音声実現は [v] とある。また、王成有 (2003) の記述には/v/が用いられ、さらに「歯化母音」として/ɥ/という文字による表記があるが、実際の音価は解説がなく不明である。一方で陳康 (2010:72, 74, 78) に「歯化合口音」として/ɥ/があり、/u/と対立していることから、[v]と類似の音を意図しているのではないかと考える。この場合、イ語ラル (Lalu)、ラロ (Lalo)、タル (Talu)、リポ (Lipo)、ラヴ (Lavü) 各方言群も音素/v/をもつ言語になる³。字形から推測するに、/ɥ/は/ɥ/のことを指す可能性が高い。音素的な/v/については、各種文献で母音の具体例において、その他の母音とともに最小対もしくは疑似最小対が与えられていることから、母音音素として取り扱うことができるといえる。

本稿では、音節核を担う [v]、すなわち [ɥ] を“唇歯母音”と呼ぶ。“ɥ”をつけているのは、この音が他の一般的な母音の定義と異なり、「舌と関わりのない分節音」であることによる。本来、母音と呼ぶことが適切であるかどうかはまず議論されるべきであるが、本稿の結論としては“唇歯母音”という名称が理にかなっていると考えている。本稿は、[ɥ]と記述される音の音素としての取り扱いについて検討することを目的としない。議論の目的は、この [ɥ] が調音音声学的にあいまいな表記であるため、表記を精密化する必要性があることを示し、区別されるべき音声とそれをいかに表記するかについて提案することである⁴。

² 「イ(彝)語」は単一言語から成るのではなく、複数の言語の複合体として理解するほうが現実的であるが、先行研究では必ずしも言語と方言の分類がはっきりしないため、ひとくくりに「イ語」と呼んでおく。

³ 王成有 (2003) の記述と陳康 (2010:72, 74, 78) の記述が互いに近い方言を扱ったものであるかどうかは判然としない。

⁴ ほかにこれまで筆者が既存の音声表記について適切な定義とともに拡張の必要性を議論してきたものには鈴木 (2005, 2010, 2011c) をあげることができる。

2 [y] が不十分な記述である理由

結論から述べると、音節核としての [y] という音声表記には、母音の定義として記述されるべき次の3点の情報がないがしろにされている。

1. 調音器官の接近性：摩擦性の高さ（より摩擦音に近いかより接近音に近いか）
2. 円唇性の有無：非円唇か円唇か
3. 舌の構音動作：[y] の調音時にとる舌の形状（舌位置）および2次的調音の有無

以上にまとめた3点は、一般的な母音であれば音標文字ごとに定義がなされているものである。しかしながら、舌を主たる可動調音器官としない [y] は、この音標文字を用いた段階で以上のすべての情報が未定義のまま置かれている。これらの問題について、朱曉農 (2010) などの先行研究でも取り上げられたことはなかったし、筆者もまた体系的に考察したことはなかった。

それでは、以上のような差異は諸言語において認められないのだろうか？

実際のところ、[y] の音色には大いに異なりが存在する。チベット・ビルマ系諸言語の先行研究において音節核を占める [y] と記述される音声は、たとえばナシ語とリス語にあるが、筆者の音声観察に基づけば両者の音価には大きな差異が認められる。しかもそれは個人的な差異ではなく、言語別に認められる体系的な差異であることが指摘できる。具体的に述べるならば、ナシ語の [y] は非円唇⁵・後舌であり、リス語の [y] は円唇・後舌である。両者の摩擦性は十分高い。ただし、両者とも舌位置の高さについては比較的広い範囲が許容され、狭～半狭程度の高さがよく見受けられる⁶。筆者の記述について疑似最小対の具体例をあげておくと、次のようなものがある。

ナシ語啓別方言⁷ /y/ /t^hy³³/「出る」： /u/ /t^hu²¹/「飲む」
 リス語阿傑方言⁸ /y/ /f_y³³/「蛇」： /u/ /ʔe⁵⁵ fu³³/「鶏卵」

以上に述べたように、/y/と分析される音は実際のところ音声学的に異なりが認められるのであるが、少なくともこれまで記述されてきた言語それ自身の記述言語学的取り扱いの中では、余剰な情報であったといえる。それゆえに、1つの言語変種の中で音声実現上の差異が存在するという現象に言及する先行研究もなかった。ところが、筆者は鈴木 (2011ab) において初めて唇歯母音の円唇性による対立を形成する言語を報告した。円唇性による対立というのはこの言語を記述する際に必要不可欠であったが、これらの論文において [y] に関する体系的な考察は加えなかった。

⁵ 非円唇とはいえ、唇を張る緊張度の高い平唇ではない。

⁶ 唇歯の接近が認められる以上、必然的に広母音とは共起しないといえる。

⁷ 雲南省維西県塔城鎮啓別村で話される。

⁸ 雲南省維西県康普郷阿傑村で話される。きしみ音を伴う場合の33調は [44] で実現されることが多い。

3 “唇歯母音”間の対立

3.1 チベット系諸言語における実例

筆者の調査・記述したチベット系諸言語のうち、音体系の中で複数の“唇歯母音”をもつものは大きく2種類に分かれる⁹。1つはカムチベット語 Zhollam (勺洛) 方言で、もう1つは舟曲 [’Brug-chu] チベット語 Ongsum (八楞) 方言である¹⁰。以下にそれぞれの方言における現れをまとめる。

Zhollam 方言

Zhollam 方言の母音組織を取り扱った鈴木 (2011ab) において、“唇歯母音¹¹”に /ɣ/ と /ɣ̥/ の2つを認めた。日本語による母音の共時的記述を含む鈴木 (2011a:6) から両者の音声記述を引用すると、以下のようである。

/ɣ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、舌位置及び唇の形は [ɣ] に相当する (原注: 若年層以下の /ɣ/ の発音はそれ以外の年代のそれと異なりが認められ、その舌位置及び唇の形は丸みを帯びた [ʊ] で、かつ上前歯と下唇の間に形成される摩擦も弱い)。初頭子音が鼻音の時は [m] にもなりうる。

/ɣ̥/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、舌位置及び唇の形は [ɣ̥] に相当する。

Zhollam 方言の“唇歯母音”には円唇と非円唇の区別が認められ、以上の記述においては、非円唇を通常の音標文字を用い、円唇のものにはその舌位置と ɣ̥ の文字形式から着想を得て、中心に横棒を書き入れた形の音標文字を創造した¹²。

⁹ 単一の“唇歯母音”をもつものは、王雙成 (2012) も記述しているように、アムドチベット語の諸方言に認められる。ただし一部の方言では、筆者の観察によると、音素として分析できる。たとえば、Sharlung (東溝) 方言には /ɣ/ が認められる。調音方法は、強い円唇で舌位置は [u] が主となる。

¹⁰ これら2つの方言は互いに地域的にも系統的にも遠い関係にある。Zhollam 方言は雲南省迪慶州維西県で話される、カムチベット語 Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群維西塔城下位方言群に属する方言である。一方、Ongsum 方言は甘肅省甘南州舟曲県で話される、言語所属未定の独立方言群の1つである。甘南州南東部のチベット語諸方言については、楊士宏 (2009:67-95) を参照。Ongsum 方言の言語特徴を見る限り、筆者の言うヒャルチベット語 (鈴木 2007:31-32) と共通するところが指摘できるが、詳細な検討が必要である。チベット文化圏東部のチベット系諸言語の言語・方言分類に関しては、鈴木 (2009) を参照。

なお、Zhollam 方言と同一下位方言群に属する sKobsteng (格登) 方言にも音素 /ɣ/ が認められる。

¹¹ 鈴木 (2011b) では「子音性母音」と呼んでいる。なお、[ɣ] を含むアムドチベット語の複数の方言の記述を扱う王雙成 (2012:286-287) では、[ɣ] を [u] の摩擦化というように分析する。このため、音体系上は [ɣ] は /u/ の異音として帰納されているものと考えられ (王雙成 2012:77)、「摩擦化母音」と呼ぶ部類に入れている。

なお、潘悟雲等 (2012:4) には「摩擦母音」と訳せる用語が用いられていて、「摩擦化母音」か「摩擦母音」かそれとも「子音性母音」か、用語として未整理の状況が反映されていると言える。

¹² 以上2種の音素について、その蔵文との対応関係を簡潔にまとめると、次のようになる。

/ɣ/ : 蔵文-o, -ed, -rel, -rol

/ɣ̥/ : 蔵文-e'u

Ongsum 方言

Ongsum 方言は最近筆者が記述したもので、記述報告はまだ提出していない。この方言では、“唇歯母音”について音韻的に次の4種類の音声に対立を形成し、それぞれの音声記述は以下のようになる。

- /ɥ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、軽微の摩擦が生じる。舌位置及び唇の形は [ɥ] ¹³ に近い。
- /ɸ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであり、軽微の摩擦が生じる。舌位置及び唇の形は [ɸ] に近い。
- /ɥʷ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであるが、/ɸ/のときより狭めは少なく、摩擦が聞こえない時もある。舌位置及び唇の形は [oʷ] に近い。
- /ɸʷ/ 主たる調音部位は上前歯と下唇の間の狭めであるが、/ɸ/のときよりも強い摩擦が生じることが多い。舌位置及び唇の形は [øʷ] に近い。

Ongsum 方言には各母音に体系的に軟口蓋化の有無が対立するため、以上のように舌位置に4つの対立が生まれている ¹⁴。以上の音素はそれぞれ最小対は少ないが /u, ɸ, uʷ, ɸʷ/ などとも対立すると考えて問題ない。Ongsum 方言の記述は先行研究が存在しないため、以下に具体例をあげる。

/ɥ/ : lɥ tə 「話す」	/u/ : s ^h ɥ lu 「のこぎり」
/ɸ/ : lo tɸ 「穀物」	/ɸ/ : ^h lɸ 「太もも」
/ɥʷ/ : ^h lɥʷ 「風」	/uʷ/ : puʷ zə 「蒸しパン」
/ɸʷ/ : lɸʷ 「羊」	/ɸʷ/ : tɕ ^h ɸ ɕɸʷ 「バケツ」

3.2 “唇歯母音”：表記すべき情報

3.1 で見たように、“唇歯母音”間に対立が認められるような場合に対応するためには、単に [ɥ] と記述するだけでは不十分である。2節で指摘した問題点について、筆者は以下のような表記法を提案する。

¹³ より正確には、[ɥ] より後ろよりで舌位置も若干低く、スウェーデン語音声学で用いられる [œ] の舌位置に近い。

¹⁴ 以上4種の音素について、その主な蔵文との対応関係を簡潔にまとめると、次のようになる。

/ɥ/ : 蔵文-ab, -ib, -ub, -ob, -od, -ong, -os, -or

/ɸ/ : 蔵文-og(s), -in, -un, -ir

/ɥʷ/ : 蔵文-um, -ung(s), -ul, -ur

/ɸʷ/ : 蔵文-ug(s)

ただし例外も多く、/ɥ/に蔵文-og(s) が対応したり、/ɸ/に蔵文-ug(s) が対応することもあり、注意が必要である。

調音器官の接近性

少なくとも既存の音標文字を用いるということを前提にするならば、調音位置における接近性について、定義済みの音標文字から [ɣ] (摩擦性の強いもの；本来の音標文字の定義は唇歯摩擦音) または [ɥ] (摩擦性の弱いもの；本来の音標文字の定義は唇歯接近音) を選ぶことができる¹⁵。また、音節核の位置にあることを明示する補助記号 [] も付加するべきである¹⁶。

円唇性

現在の筆者の使用状況に照らせば、[ɣ] を非円唇、中央の横棒を加えた [ɣ̥] を円唇として記号を定義している。ただし後者は、3.1 で記述した2種のチベット系言語の例を見からもわかるように、舌位置が中舌であることを前提として考えているため、単に円唇という意味で用いているのではない。つまり記号の構成上、円唇中舌をひとまとめに有標として扱い、それ以外を無標とすることになる。

ただしこの措置は、鈴木 (2011ab) において Zhollam 方言の記述に際して必要に迫られて行ったものであるから、有標無標の関係がこのままでよいかどうかは一度検討の必要性があるかもしれない。

舌の調音動作

これまで筆者は舌位置を表す点について一度も検討してこなかったため、これが問題として残される。

Zhollam 方言の/ɣ/と Ongsum 方言の/ɥ/は、唇歯部における接近性のほかに舌位置が異なっている。これを簡潔に表すために、1つの案として、一般の母音組織を構成する音標文字を直接用いて、たとえば以下のように表すことができる。

Zhollam 方言/ɣ/ : [ɣ̥]

Ongsum 方言/ɥ/ : [ɥ̥]

ナシ語啓別方言/ɣ/ : [ɣ̥]

リス語阿俣方言/ɣ/ : [ɣ̥]

¹⁵ これについては、王成有 (2003) などの先行研究でも行われているところである。また、段亞廣 (2012:69-76) の漢語中原官話諸方言の記述および音変化の過程の推定でも、音節核に [ɣ] や [ɥ] が使われている。

ただし、摩擦性の観察と分析については、個人差も出てくる。ナシ語について、黒澤 (2009) は音韻表記に/ɣ/を用いつつも音声実現としては唇歯接近音 [ɣ] であると述べるが、「下唇と上歯の摩擦音が強く聞こえることもある」とも述べている (p.71)。記述対象の方言の違いもあるが、筆者の観察では、通常は唇歯間の摩擦音が強く聞こえるため、発話によって摩擦が弱まるというのが実際の状況に近い。もしもナシ語の事例を [ɣ] と記述する場合、チベット語 Ongsum 方言の/ɥ/に対する音声記述の方法に困難が生じる。ナシ語の事例は基本的に/ɣ/ [ɣ] とするほうがより現実的であろう。

¹⁶ 複数の先行研究では、補助記号 [] を付加していない。これについて、補助記号を使用すべきとの潘悟雲等 (2012:4-5) による指摘がある。

母音の音標文字は舌位置とともに円唇性についての情報も含まれているため、以上の方式で Zhollam 方言の/ɥ/と Ongsum 方言の/ɥ/を表す場合、中央の横線を加える必要性はなく、それぞれ以下のように示すことができる。

Zhollam 方言/ɥ/ : [ɥ_u]

Ongsum 方言/ɥ/ : [ɥ_o]

ただし、以上の案を実際の言語記述に適用した例はこれまで存在しないため、必ずしも表記が妥当であるかどうかは検討課題である。特に、既存の母音用音標文字を直接用いる場合、円唇性について異なりを設ける必要性はないといえる。ただし Zhollam 方言や Ongsum 方言のように、舌位置と円唇性について“唇歯母音”が対立を形成する場合、[ɥ] と [ɥ] のように表すのも利便性がある。いずれにせよ、音声学的に詳細な記述においては、以上のような情報を提供することが必要不可欠であると考え¹⁷。

以上、調音器官の接近性、円唇性、舌位置の3つの特徴について、いかに表記するか提案した。続いて、次節において簡単に実際の議論の中で用いることにより、その有用性を検討してみることにする。

4 “唇歯母音”の舌位置に注目することで理解できる問題：雲南省北西部の諸言語を例に

雲南省北西部で話されるペー語、ナシ語、リス語、カムチベット語などのいくつかの言語には音素/ɥ/ もしくは音声実現として [ɥ] をもつ変種が存在することが報告されている。筆者はこれらの言語について少なくとも2つ以上の変種について直接観察し、[ɥ] の調音音声学的な特徴を確認した。

さて、木仕華 (2012) はナシ語の東巴文字読音の中に認められるチベット語からの借用語について取り上げているが、その中に [ɥ] (本文中では [v]) を含む例があがっている。たとえば、[dv³¹dzɯ³³] や [dv³¹dzɿ³¹] 「金剛」というナシ語はチベット語(蔵文) *rdo rje* からの借用語である。ただし、木仕華 (2012) は借用の経路については取り扱っていない。一方、和繼全 (2012) もまた東巴文字読音の中に認められるチベット語読みの音について取り上げているが、その中に [fv⁵⁵] 「猿」という例が含まれ、蔵文 *spre'u* の rGyalthang (建塘) 方言形式との関連を示している¹⁸。

ナシ語に取り入れられたチベット語由来の語がチベット語方言との接触によって得られたも

¹⁷ 先行研究の中には、これらの情報を明確に記述するものもある。たとえば、和即仁 (2007) はカツォ語の/v/について「実際の音価は [v] で、発音時に下唇と上歯の間で軽い摩擦があり、唇はやや引き、舌位置は u より前寄り」ということを記述している。上述の提案を適用すれば、さしずめ [ɥ] といったところか。

¹⁸ rGyalthang 方言の「猿」は /'ɕwa/ もしくは /'ʔa ɕu/ であり、ナシ語東巴文字読音 [fv⁵⁵] と似ているとは言い難い。周辺のそのほかのカムチベット語方言を見てみると、rGyalthang 方言と同じ方言群に属する Choswateng (吹亞丁) 方言では /'ʔa hu/ となり、Daan (大安) 方言では /xö jā/ となる。むしろこれらに含まれる音節に対応関係を見出すことができる。ただし、これらのカムチベット語方言において、[ɥ] は音素でないだけでなく、音声学的にも未確認である。

のと考えるとき、地理的観点から Sems-kyi-nyila 方言群の諸言語と接触した可能性がもっとも高い。しかしながら、文語読音からの借用の場合も存在するため、方言形式以外の可能性も否定できない。筆者はナシ語の以上の語について、白地方言および啓別方言の発音を記録した。いずれの方言でも、「金剛」の第1音節は $[d\gamma_{uu}^{21}]$ という発音になり、「猿」のチベット語音による読みは $[f\gamma_{uu}^{55}]$ という発音になっている。つまり、唇歯の接近度が強く、非円唇で唇は突き出さず、舌位置は後舌で高いということである。この $/\gamma/$ の特徴はカムチベット語 Zhollam 方言に見られる $/\gamma/$ と音声学的には類似しているといえる。しかも Zhollam 方言では、蔵文-o#に対して $/\gamma/$ (発音は $[\gamma_s]$) が対応し、蔵文-e'u に対して $/\gamma/$ (発音は $[\gamma_u]$) が対応するため、母音の蔵文との対応関係から見れば、上記のナシ語に認められるチベット語由来の読音の形式と並行することになる。

しかしながら、歴史的観点からは別の見方もある。ナシ語が先に $/o/ > / \gamma /$ という変化を経験し、Zhollam 方言がそれに引き続いて $/o/ > / \gamma /$ の変化を経験したというものである。実際のところ、Zhollam 方言において $/o/ > / \gamma /$ がいつごろ起こったかはまだ判明しておらず、周辺のカムチベット語諸方言と比べても類似の例がなく、Zhollam 方言に独自の音変化であるため、推測するのも難しい。

ただし $/\gamma/$ の調音音声学的特徴を明らかにすることを通じて1つ明確になったことは、Zhollam 方言の周辺部で話されるリス語に認められる $/\gamma/$ が同方言に与えた影響は少ないのではないかということである。リス語の $/\gamma/$ は $[\gamma_u]$ であることが通常で¹⁹、非円唇の自由変異はほぼ確認されないため、Zhollam 方言に起きたであろう音声変化に関与している音とは異なるものと考えられるからである²⁰。

“唇歯母音”の音声特徴を明らかにすることによって、これまでになかった視点から言語現象を検討できるようになることが期待されるだろう。

5 まとめ

本稿では、音節核を担う $[\gamma]$ をめぐって、その音声表記の問題を明らかにし、それをいかに解決するかに関する提案を行った。また、 $[\gamma]$ の詳細な音声実現の記述を利用した簡潔な試論を加えた。

“唇歯母音”とは奇妙な名称である。しかしながら本稿で見たように、“唇歯母音”は一般の母音と同じように舌位置を調整して音色を変えることができる。この音はあくまでも唇歯音が主たる調音音声学的特徴であって、一般の母音の唇歯音化でも摩擦音化でもない。 $[\gamma]$ や $[\psi]$ などの音節核を担う要素に対する呼称として、やはり“唇歯母音”という名称を提案したい。

¹⁹ 先行研究におけるリス語の記述では、木玉璋、孫宏開 (2011:19-23) の永勝方言を除いて、音韻的な $/\gamma/$ は認められず、 $/u/$ の変異音として $[\gamma]$ が存在することになっていることがある。ただし2節で言及したように、阿傑村の方言では $/\gamma/$ と $/u/$ が対立し (鈴木 2012)、それらは木玉璋、孫宏開 (2011:162-163) の維西方言ではいずれも $/u/$ と記述されている。このような経緯がリス語阿傑方言の $/\gamma/$ が円唇性の強い発音であることと関係するかもしれない。

²⁰ 一方で Zhollam 方言の若年層の話者が $/\gamma/$ について $[\gamma_s]$ よりもむしろ $[u]$ に近い発音をするという点は注目に値するといえる。 $[\gamma_s] > [u]$ が生じた原因については不明である。

参考文献

- 黑澤直道 (2009) 「ナシ (納西) 語大研鎮方言の音韻体系 : 先行研究との比較を中心に」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 第 77 号 63–81
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 第 69 号 1–23
- (2007) 『川西民族走廊・チベット語方言研究』 京都大学博士論文
- (2009) 川西地区 “九香線” 上の藏語方言 : 分布與分類 《漢藏語學報》 第 3 期 17–29
- (2010) 「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」 大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 2, 107–113
- (2011a) 「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」 大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 3, 1–35
- (2011b) 嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源 《語言暨語言學》 第 12.2 期 477–499
- (2011c) 「チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態」 『言語研究』 第 140 号 147–158
- (2012) 《維西僜僜語阿僜話 “緊元音” 的語音描写》 第六屆國際彝緬語學術研討會發表論文 (成都)
- 白碧波、許鮮明、楊艷、文艷、季紅麗、石常艷、曹冰雪、陳勰、肖黎、白京、沐華、畢艷紅 (2012) 《撒都語研究》 民族出版社
- 陳康 (2010) 《彝語方言研究》 中央民族大學出版社
- 戴慶廈、劉菊黃、傅愛蘭 (1991) 卡卓語 戴慶廈、黃布凡、傅愛蘭、仁增旺姆、劉菊黃 《藏緬語十五種》 249–280 北京燕山出版社
- 段亞廣 (2012) 《中原官話音韻研究》 中國社會科學出版社
- 蓋興之 (2007) 堂郎語 孫宏開等主編 366–378
- 和繼全 (2012) 東巴文藏語音字研究 《西南民族大學學報 (人文社會科學版) 》 第 5 期 52–57
- 和即仁 (2007) 卡卓語 孫宏開等主編 426–446
- 姜竹儀 (2007) 納西語 孫宏開等主編 346–365
- 李永燧 (2007) 哈尼語 孫宏開等主編 308–326
- 木仕華 (2012) 納西東巴文涉藏字符字源匯考 《民族語文》 第 5 期 74–81
- 木玉璋、孫宏開 (2011) 《僜僜語方言研究》 民族出版社
- 潘悟雲、江荻、麥耘 (2012) 有關計算機數據處理的記音規範建議 《民族語文》 第 5 期 3–7
- 孫宏開 (2007) 柔若語 孫宏開等主編 447–467
- 孫宏開、胡增益、黃行 主編 (2007) 《中國的語言》 商務印書館
- 汪鋒 (2012) 《語言接觸與語言比較—以白語為例》 商務印書館
- 王成有 (2003) 《彝語方言比較研究》 四川民族出版社
- 王雙成 (2012) 《藏語安多方言語音研究》 中西書局

- 徐琳、趙衍蓀 (2007) 白語 孫宏開等主編 515-538
楊士宏 (2009) 《安木多東部藏族歷史文化研究》民族出版社
張蓉蘭、馬世冊 (2007) 拉祜語 孫宏開等主編 286-307
趙燕珍 (2012) 《趙莊白語參考語法》商務印書館
朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)